

古文化

受け継がれる、日本屋根の伝統美。

第115号



熊野本宮大社 本殿
[和歌山県田辺市本宮町本宮]



公益社団法人 全国社寺等屋根工事技術保存会

くまのほんぐうたいしゃ 熊野本宮大社

[和歌山県田辺市本宮町本宮]

御由緒・歴史

紀の国 音無川のほとりに鎮まります、熊野本宮大社(旧官幣大社熊野坐神社)は、熊野三山(本宮、新宮、那智)の首座として熊野信仰の総本宮と仰がれており、平成30年には御創建2050年を迎えます。

主祭神は、家都美御子大神(熊野加武呂乃命)でありまして、昔は熊野坐大神と申し上げ、「熊野に鎮まります大神」と云う広大な意味であります。熊野坐大神の御鎮座の年代は文献に明白ではありませんが、神武天皇御東征以前には既に御鎮座になったと云われており、社殿は615年、第十代崇神天皇の時代に創建されたと『皇年代略記』『神社縁起』等に記載されております。

奈良朝の頃より熊野に於いては仏教を取り入れ、平安朝以後は仏化して「熊野権現」と称し、祭神に仏名を配するようになりました。本社は上・中・下社の三社より、故に熊野三所権現と呼ばれ、十二殿に御祭神が鎮座しましたところから熊野十二権現とも仰がれました。

平安朝に入り、熊野御幸については皇室の御崇敬あり国史に重きをなすに至りました。宇多法皇に始まる歴代法皇・上皇・女院の熊野御幸は百余度の多きに達し、他社にその例をみません。斯くの如く熊野御幸のあったことは、厚き御崇敬と御信仰によるものであります。

南北朝から室町時代にかけては、皇族や貴族などの上流階級に代わり、武士や庶民の間に熊野信仰が広がりました。「蟻の熊野詣」の古諺、「伊勢に七度、熊野に三度」の俚謡によりまして、天下万民が信仰を捧げたことが伺えられ、明治維新に神仏分離が行われ、今日に至っております。

縁起・神話

天火明命は、古代、熊野の地を治めた熊野国造家の祖神です。天火明命の息子である高倉下は「神武東征」に際し、熊野で初代神武天皇に天剣「布都御魂」を献じてお迎えしました。時を併せて高御産巢日神は天より八咫鳥を遣わし、神武天皇を大和の橿原まで導かれました。

第十代崇神天皇の御代、旧社地大斎原の樫の巨木に、三体の月が降臨しました。天火明命の孫に当たる熊野連はこれを不思議に思い、「天高くにあるはずの月が、どうしてこのような低いところに降りてこられたのですか」と尋ねました。すると真ん中にある月が、「私は證



「参道入口 鳥居と八咫鳥旗」神が宿る神域と人間が住む俗界との結界とされる

誠大権現(家都美御子大神＝素戔鳴尊)であり、両側の月は両所権現(熊野夫須美大神・速玉之男神)である。社殿を創って齋き祀れ」とお答えになられました。この神勅により、熊野本宮大社の社殿が大斎原に創建されたと云われております。初代の熊野国造には高倉下の子孫である、大阿斗宿禰が就任され、その後千数百年の間、熊野本宮大社の神々は熊野国造家の子孫によって代々お祀りされてきました。

導きの神 八咫鳥

神武東征の故事に習い、導きの神として厚い信仰がある八咫鳥の「八咫」とは、「大きく広い」という意味です。

八咫鳥は太陽の化身で三本の足があります。この三本の足はそれぞれ天・地・人をあらわすと云われております。天とは天神地祇、すなわち神様のことです。地とは大地のことで、我々の住む自然環境を指します。つまり太陽の下に神様と自然と人が血を分けた兄弟であるということ、二千年前に示されていたのです。

大斎原(旧社地)

熊野本宮大社はかつて、熊野川・音無川・岩田川の合流点にある「大斎原」と呼ばれる中洲にありましたが、明治22年の大洪水の後、水害を免れた上四社を現在の地に遷しまつり、大斎原には二基の石祠を造営、西方に中・下四社、東方に元境内内摂末社を合祀申上げております。



「日本一の大鳥居(高33.9m,幅42m)」背後に見えるこんもりした森が大斎原

檜皮採取者養成研修 第17期生 及び 平成29年度 檜皮採取中級研修 始まる

今年度の檜皮採取養成研修事業には、4名の初級研修生が受講しています。8月21日から京都市文化財建造物保存技術研修センターにて原材料性質と種類や労働安全衛生法などの講義を3日間受け、9月4日には原皮師の道具の一つ「へら」を手作りし、同日に河内長野市の市有林において実技研修を開始いたしました。

初級研修



4名の初級生のうち2名は経験者、2名は全くの未経験者です。今後出会う色々な指導員の下で、経験者の2名にはこれまでに身につけた技術の見直し、未経験者の2名は少しでも追いつける様に研修に取り組んでもらいたいと思います。

今年度の中級研修生は24名で、9月4日から翌年2月中頃まで全15クール(1クール2週間4～6名)におよぶ採取研修を、近畿中国森林管理局内(全4ヶ所の国有林)・中部森林管理局内(全2ヶ所の国有林)・京都大学徳山試験地にて受ける他、初級研修生の指導の為、九州大学演習林、そして民有林では京都府、三重県にも入っています。

今年度も国有林をはじめ、各山林所有者の方々には当会の研修事業にご理解とご協力を賜り、誠にありがとうございます。保存会として研修生の技術向上などの育成に取り組んでいきたいと思っています。

中級研修



茅葺師養成研修 第4期生 後期終了

2年を1期として、茅葺の初級研修を行っています。2年目の後期では、より深く掘り下げての実技研修となるよう進めてきました。切妻の屋根模型での実習では、なかなかうまく葺き上げることができず、屋根葺の奥深さを理解してくれたことと思います。講義においても、実技での経験を積む毎に考え方に変化が表れ、より一層真剣に学んでくれたものと思います。なかなか普段の現場ではできないことに取り組み、しかもゆっくり考えながらできること。それは、これからの長い茅葺人生の中で、大変充実した時間であったと確信しております。日本の茅葺界を引っ張っていける存在になることを期待しています。

最後になりましたが、このような機会を与えてくださった関係者の皆様に御礼申し上げます。

実習



座学



平成29年度 茅葺中級研修

9月4日より、京丹後市久美浜町安養寺の木造茅葺鐘楼兼山門を実施現場に、茅葺中級者研修を行いました。この建物は、棟札に宝暦4年(1754)とあり、今から263年も前の貴重な建造物でした。たまたま茅葺の研修で現場提供をお願いしたところ、ご承諾をいただき、せっかく屋根を新しくするのなら、柱等の骨組みも新しくしようと、檀家様一同決意されました。木部は新しくなり、垂木も新たに組み直し、屋根を葺き上げましたが、いつも気をつけているのは、地方性を大切に…ということです。前回屋根を葺かれた職人さんを調べ、出来るだけこの地方のやり方を再現しながら屋根を復元、完成させました。

中級の研修生には、難しい部分もあったとは思いま

すが、うまく仕上がっていると感じております。現場を提供いただいた安養寺様、関係者の皆様に御礼申し上げます。



角ととのえ



破風つけ



軒刈り



葺き替え前



葺き替えを終えた安養寺鐘楼門

平成29年度 茅葺きフォーラム 開催

期 日 ● 平成29年9月26日(火)
会 場 ● 普門山安養寺
(京都府京丹後市久美浜町安養寺125)

中級者研修の終盤に差ししかかったころ、年に1度の茅葺きフォーラムを行いました。毎回全国の茅葺き職人に声をかけ、今後の課題や現状、抱える問題を話し合い、茅葺きという限られた分野での交流を深めていき、発展的に次の時代へと繋いでいくのが目的です。丹後独特の笹葺きについても大いに考えさせられた1日でありました。

京都府の鶴岡様には、大変意義のある講演をしていただき、多くの職人が感銘したことと思います。ご協力いただいた、京丹後市教育委員会 吉田様、文化庁 黒坂様、また、現場、会場とお世話になりました安養寺藤村住職、檀家及び関係者の皆様に深く御礼申し上げます。



安養寺鐘樓門

見学会 「安養寺鐘樓門」

現場説明 ● 公益社団法人 全国社寺等屋根工事技術保存会 正会員 山田 雅史

協議会 「安養寺庫裏」

開会挨拶 ● 公益社団法人 全国社寺等屋根工事技術保存会 会長 村上 英明

来賓挨拶 ● 文化庁文化財部参事官付(建造物担当)修理企画部門 文化財調査官 黒坂 貴裕

京丹後市教育委員会 文化財保護課長 吉田 誠

普門山安養寺 住職 藤村 康信

講演 ● 京都府教育庁指導部 文化財保護課 建造物担当課長 鶴岡 典慶

題目「文化財修理における伝統技術と材料の諸課題について」

討論会 ● 議題「茅葺きの地方性について」

〔司会〕公益社団法人 全国社寺等屋根工事技術保存会 正会員 中野 誠

総評 ● 文化庁文化財部参事官付(建造物担当)修理企画部門 文化財調査官 黒坂 貴裕

閉会挨拶 ● 公益社団法人 全国社寺等屋根工事技術保存会 副会長 長崎 真知夫



講演風景
鶴岡 典慶様

見学会



修理現場見学



実習見学

協議会



来賓挨拶 黒坂 貴裕様



来賓挨拶 吉田 誠様



来賓挨拶 藤村 康信様



会場風景



討論会風景

平成29年度 第2回 指導者研修会

期 日 ● 平成29年9月21日(木)
会 場 ● 中部森林管理局木曽森林管理署
(長野県木曽郡上松町大字正島町1-4)
赤沢自然休養林
(長野県木曽郡上松町 小川入国有林)

今年度5月に行った指導者研修会に於いて、京都大学藤井義久教授による「柿葺屋根の早期劣化の現状と課題」のご講演を受け、柿資材の現状をより把握する為、中部森林管理局木曽森林管理署のご協力の下、木曽を会場に第2回指導者研修会を開催しました。

永瀬庄栄企画官から木曽谷における森林施業計画の概要や天然資源を取り巻く環境について説明を受けた後、赤沢美林にて天然木の育成状況を見学させて頂きました。全国の文化財建造物の柿葺に使用される天然サワラは、この木曽谷から産出されています。天然資源の保護による出材の減少は、技術の継承にも大きな影響を与えかねません。

檜皮・柿・茅と植物性資材を扱う団体として、資材確保は重要な課題です。森や自然と共に歩んできた我々の技術が未来に向かってしっかりと継承されていくために、我々も多くの事を学んでいかなければなりません。

本研修会にご協力を頂きました管理署の皆様、この場を借りて厚く御礼申し上げます。



永瀬庄栄企画官から説明を受ける参加者



天然サワラの芽を撮影・観察する参加者



参加者が見学場所に向かう赤沢自然休養林



サワラの本木を観察する参加者

平成29年度 檜皮採取技術査定会

期 間 ● 平成29年10月5日(木)～6日(金)

会 場 ● 宮島国有林(広島県廿日市市)

今年度の檜皮採取者技術査定会では、初級研修生4名と中級研修生7名の計11名に、指導員2名と指導補助員3名が当たりました。

2日目の予報が雨のため作業が出来ないと判断し、初日の半日ほどで採取から荷造りまでの作業を完了させました。半日ほどの時間だけでは力量を出し切れなかった者もいたと思いますが、通常の研修も考課値に加味されますので、日頃の研修事業に真剣に取り組んで挽回してもらいたいと思います。今年度の研修事業が終了後、査定会での評価と合わせ、来年度の技術ランクを決定いたします。残りの研修には最後まで集中してあたってください。

参加各事業所におかれましては、研修事業へのご協力と研修生への日頃のご指導をよろしくお願い致します。

最後になりましたが、この度の査定会にご協力いただきました広島森林管理事務所及び廿日市市関係者、近隣住民の皆様に心より感謝申し上げます。



緊張のなか採取に真剣に取り組む研修生



最後の荷造りまで査定会員の目が向けられる



根元にへら入れをする



振り縄とへらを使い皮を剥きあげる



枠に並べた皮を結束する



結束した檜皮(丸皮)を前に集合写真

文化財屋根葺士養成研修 第22期生 後期研修 終了

平成29年度国庫補助事業、文化財屋根葺士養成研修第22期生の後期研修は平成29年5月8日より始まり、京都市文化財建造物保存技術研修センターでは、座学、製図の研修を受講し、実技では道具皮の材料整形、4か所の屋根葺現場実習を実施。そして、集大成と言える卒業現場実習では、厳島神社(広島県廿日市市)の御本殿通用門において初級研修生主体で檜皮葺屋根を葺き上げる実習を行い、10月10日、無事全課程を終了しました。この間、研修生は924時間を履修致しました。

前期と違い、後期のより専門的な内容に、研修生の目は生き生きとし、新しい工法、素晴らしい文化財を見学できる建築史演習など、真剣に取り組めていたように感

じました。今後も技術の研鑽に励むのは勿論のこと、この2年間共に切磋琢磨してきた同期生とも連絡を取りながら叱咤激励し、一人前の職人となれるよう頑張っていっていただきたいと願います。

最後になりましたが、関係者の皆様には御礼を申し上げますとともに、今後ご指導ご協力の程宜しくお願い致します。



白石悦二先生による実測実習



檜皮葺屋根模型の軒切り実習



「中入れ」の製作



白石悦二先生による製図実習



後藤佐雅夫先生による建築史演習



高台寺山国有林において労働安全衛生法の講習

卒業現場実習 (厳島神社 御本殿 通用門)



平成29年度 特別講座 開講(全3回)

第1回「文化財修理と国際交流」

株式会社 宇佐美松鶴堂
九代目 宇佐美 直八



日 時 ■ 8月5日(土) 14:00～16:00
会 場 ■ 文化財建造物保存技術研修センター

浄土真宗の総本山である本願寺のお足元で200有余年の歴史を刻んでこられた株式会社宇佐美松鶴堂。代々当主は「直八」の名跡を名乗るしきたりとなっている宇佐美家の九代目 直八様にお越しいただき、表具業・表装師としての決意を伺いました。

【講演内容要約】

過去から学び、未来に生かす

江戸時代 天明年間に伊勢から出てきた初代直八が、西本願寺門前で表具業を創業したのが始まりです。当初、西本願寺並びに全国の西本願寺末寺、また一般の方の表装を手掛けて歴史を重ねてきました。その後、太平洋戦争が始まるのですが、敗戦後にGHQの指令部が占領下の各都市を見て回り、特に西本願寺にある障壁画の傷みが激しいことに目が止まったようです。日本政府に保存修理を強く指示し、昭和21年、宇佐美松鶴堂にその修理依頼がきました。昭和25年にはそれまでの実績が認められ、京都国立博物館内に文化財保存修理所として作業する場を得ました。以来、絵画・書蹟・染織品の文化財修理を着実にを行い、実績を重ねながら、昭和49年には株式会社宇佐美松鶴堂と改称しました。現在、京都国立博物館文化財保存修理所は、国指定の文化財を中心とする修理工房 株式会社松鶴堂として分社致しました。西本願寺門前の本家では、それ以外の文化財修理を行う工房として現在に至っております。私は、父の死去後、平成26年11月に九代目として直八を襲名させていただきました。

昭和50年代になりますと、弊社の木造社屋はビルの谷間になりました。私達がお預かりするのは非常に大切な物です。当時、家の中のあらゆるところに「火之用心」と書いた紙が貼ってあったのを記憶しています。そのようなこともあり、昭和63年、思い切って社屋の建て替

えをしました。新社屋は、門前町の古く落ち着いた町並みに調和しながらも、伝統美術品を扱うにふさわしい外観を兼ね備え、耐震耐火設備の整った建物へと生まれ変わりました。お客様からお預かりした美術品を最高の技術で修理させていただくのはもちろんのことですが、いかに安全に保管しておくかということがとても重要なことなのです。作業場には、博物館・美術館と同様の設備を取り入れるよう心掛け、温湿度自動調節や常時計測、室内の光源も無紫外線ライトを使用。美術品へのダメージを最大限減らす工夫をしています。

伝承されてきたことの意味

表装に使う大切な材料に、和紙、糊、^{きれ}裂の3種類があります。その一つである和紙には色々と種類があるのですが、昔ながらの繊維を原料として手漉きしている和紙が修理にはなくてはならないのです。漉かれた和紙は天日干しで自然乾燥後、しばらく寝かせてから使います。

また、糊は手炊きと言い、自社内で炊いております。小麦粉の澱粉に井戸水を入れ大鍋で約1時間、炊き上がったばかりの糊を甕に入れて一昼夜冷やします。こうして作る糊を「新糊」と言うのに対して、「古糊」または「寒糊」と言う糊があります。材料は一緒なのですが、大寒の寒い時期に炊いた新糊を大甕に入れ、上に水を張り、毎年水を替えながら10年間寝かせます。初めの数年はカビがたくさん発生しますが、毎年水を替えていくうちに徐々にカビが少なくなっていきます。「古糊」とは、10年経ち、接着力の弱くなった糊のことで、巻き状になる掛軸などの裏打ちに使うことで、しなやかさを保た



講演後に、道具を見たりお話をされたりする参加者の皆さんと宇佐美様

せることができるのです。この古糊を使っていれば、将来、再修理のときに、和紙に少しの水気を与えるだけであまり負担をかけることなく剥がすことができます。次の世代のことを考え、可逆性のある自然の材料、また、旧来からの技法を使うことが大変重要なのです。

新入社員が入ってきて最初にする作業がこの糊炊きであり、修行を始めて一人前になる10年を迎えたときに、初めて自分で炊いた糊を使うことになります。

継承に繋げる最新技術

文化財の修理は、医療に例えられます。美術品1点1点それぞれの状態が違いますので、修理カルテというのを作り、そこにすべての情報を記入していきます。肉眼で見えない傷はルーペを使って調査をします。もっと深く細かく見るときには実体顕微鏡を使って確認し、写真撮影をして記録を取ります。場合によっては紫外線照射、赤外線撮影、さらに調査を進める場合には、測定器を使うこともあります。科学的な裏付けなどを加えながら修理前の現状を把握し、データに基づいて最善の修理を進めていくのです。

掛軸の本体である書や絵画などを本紙と言うのですが、主に紙本と絹本^{けんぽん}の2種類があります。絹本の場合、傷んでいる箇所となる絹の目の太さ、粗さなどを調査し、実際に西陣で織ってもらった沢山の絹見本から、それに近い物を選びます。その後、欠損部と同じ形に切り出して埋めていくのですが、織ってもらった絹をすぐに使うのではなく、高崎原子力研究所で電子線を当てて人工劣化させます。新しい絹はしっかりとして強度が高く、オリジナル部分を傷つけることがあるため、できるだけオリジナルに見合う弱さに近づけるのです。これらの作業を補絹^{ほけん}と言いますが、織り方はもちろん、老化の具合も類似させ、元来の風合いを損なうことのないように修理をすることが可能です。最新技術の導入もまた、伝統文化を守り、引き継ぐためには必要な取り組みだと考えています。

国際文化交流の必要性

ここまで説明してきました材料を使い、尚かつ伝統的な技術で修理を行っているのは、実は日本だけではなく、外国でも同じようなことをされています。日本の美術品というのは、明治時代初期と太平洋戦争終結後の2回にわたって海外に流出してしまいました。アメリカやヨーロッパ、アジアの主要都市にある美術館にも保存されているのですが、美術品の経年劣化は免れません。以前は、里帰り修理と言って、その作品が傷んでくると日本に持ち帰り、日本で修理がなされていました。しかし、航空運賃の費用、万が一の事故、環境の違いからくるダメージ等々、それには大きなリスクが伴います。それでも日

本で修理をしなければならない時代があったわけです。そういうこともあり、弊社では、私の祖父の時代から少しずつ外国人研修生に日本の技術を伝えてきました。これまでに60人ほどを受け入れており、習得した技術をもって文化財修理の世界で、技術者または教育者として広く活躍しています。

表具の仕事というのは、元を辿れば中国から仏教と共に朝鮮半島を通して流れてきたうちのひとつです。そのルーツである中国との技術交流を深めようと、北京の故宫博物院を訪れたことがあります。私たちは、美術品をいかに良い環境で、良い保存状態で次の時代に伝えようかということをいつも考えているのですが、当時、中国の方との感覚があまりにもかけ離れていることに驚かされました。オープンな環境の中で、まわりとの交流を遮断した修理が連綿となされているようでした。次に北京の方々を日本にお迎えしたときには、中国を離れるのが初めてという方ばかりでしたので、見るもの、触るもの、非常に感動しておられました。弊社の作業場を見てもらい、考え方や理念について説明させていただきました。諸外国の方々と交流することは、双方ともに学ぶことが大きいと思いますので、今後も文化財修理を通じて、国際交流を積極的に進めていくつもりです。

最後に、宇佐美家には四代目直八が残してくれた家訓があります。「朝寝すべからず」や「咄^{はなし}の長座すべからず」といったもので、家業が必ずしも安泰ではなかった頃があり、このような家訓を残したのだらうと思っています。先人の教えを自分の戒めとして心に刻み、永代にわたって受け継いでいかねばならないと考えます。

先人から受け継ぐ昔ながらの材料や技術がいかに重要であるかということを再認識させていただいたのと同時に、時代に即したよりよい技術や考えを取り入れる柔軟な姿勢が大切であることを学ばせていただきました。

今回、講師をお引き受けくださいました宇佐美様には、この場を借りて深く御礼申し上げます。ありがとうございました。

宇佐美 直八氏 プロフィール

昭和33年8月11日、京都市生まれ。昭和58年3月、佛教大学文学部卒業。昭和58年4月、(株)宇佐美松鶴堂に入社。文化財修復技術を習得しながら、先代の下で育った技術者が各国博物館で従事している現場を視察協力。昭和59年、フリーア美術館(ワシントンDC)で短期間研修。平成7年、ウイーン近郊でICCROMに参加し(約2ヶ月間)、多国の技術者と共に研修を重ね交流を図る。平成14年、代表取締役役に就任。主な工事としては、京都迎賓館表具工事、東西本願寺の阿弥陀堂及び御影堂障壁画修理にも携わる。平成24年10月25日、8代目直八逝去(享年86歳)。平成26年11月、9代目直八を襲名。現在に至る。

特別講座

【29年度の予定】

●定員は各回50名程度(参加費無料)

●参加希望の方は事務局までご連絡ください。

TEL 075-541-7727

第1回講座「文化財修理と国際交流」

日 時 ● 平成29年8月5日(土) 14:00～16:00

会 場 ● 京都市文化財建造物保存技術研修センター

終了しました

株式会社 宇佐美松鶴堂
九代目 宇佐美 直八



昭和33年8月11日、京都市生まれ。昭和58年3月、佛教大学文学部卒業。昭和58年4月、(株)宇佐美松鶴堂に入社。文化財修復技術を習得しながら、先代の下で育った技術者が各国博物館で従事している現場を視察協力。昭和59年、フリーア美術館(ワシントンDC)で短期間研修。平成7年、ウィーン近郊でICCROMに参加し(約2ヶ月間)、多国の技術者と共に研修を重ね交流を図る。

平成14年、代表取締役役に就任。主な工事としては、京都迎賓館表具工事、東西本願寺の阿弥陀堂及び御影堂障壁画修理にも携わる。平成24年10月25日、8代目直八逝去(享年86歳)。平成26年11月、9代目直八を襲名。現在に至る。

●宇佐美松鶴堂ホームページ: <http://www.usami-shokakudo.co.jp/>

第2回講座「蘇山の青瓷」

日 時 ● 平成29年10月28日(土) 14:00～16:00

会 場 ● 京都市文化財建造物保存技術研修センター

終了しました

蘇山窯
四代 諏訪 蘇山



父 三代 諏訪蘇山・母 十二代 中村宗哲 三女 公紀(くき)
昭和45年に生まれる。京都市立銅駝美術工芸高等学校漆芸科卒業。成安女子短期大学造形芸術科 グラフィックデザインコース映像専攻卒業・専攻科修了。京都府立陶工高等技術専門学校成形科・研究科修了。京都市伝統産業技術者研修陶磁器コース本科修了。平成9年～16年、父と共に陶磁器の制作活動。

各地にて中村宗哲展(天地のかたち・源氏物語)に出品。哲公房に参加。平成14年9月、四代 諏訪蘇山を襲名。平成16年、京都高島屋にて襲名展を開催。各地にて諏訪蘇山展を開催。

(内容については次号に掲載予定)

第3回講座「京都洛中の酒造の歴史と食文化」

日 時 ● 平成30年2月17日(土) 14:00～16:00

会 場 ● 京都市文化財建造物保存技術研修センター

佐々木酒造株式会社
代表取締役 佐々木 晃



昭和45年4月1日、京都生まれ。大学卒業後、産業機械販売会社(関西日立(株))に就職するものの、本来家業を継ぐ予定であった兄(俳優・佐々木蔵之介)に代わり、平成7年入社。平成20-21年、近畿経済産業局地域イノベーション開発事業・産学公連携による「米と米麴を使った食品原料」の研究開発事業でプロジェクトマネージャを務める。その成果物として平成24年4月よりノンアルコール

飲料「白い銀明水」を販売。新しい酵母の開発や各種タイアップ・コラボ商品など、時代のニーズに合わせた商品づくりに努めるとともに、日本酒講座や京都の食文化についての講演、各種イベント企画を通じて新たな日本酒ファンを増やすことに注力している。

●佐々木酒造ホームページ: <http://jurakudai.com/>

「日本の技 体験フェア」開催

ふれてみよう！文化財を守り続けてきた匠の技

期 間 ● 平成29年9月30日(土)、10月1日(日)

会 場 ● いつきのみや地域交流センター
(三重県多気郡明和町斎宮2811)

さいくう平安の杜
(三重県多気郡明和町斎宮2800)

今年度のweb ちらし



文化庁の主催する日本の技体験フェアに出展しました。本年度は、三重県明和町のさいくう平安の杜を主会場に開催され、全国から選定保存技術保存団体が集い、技術の実演や体験コーナーを設置し、古くから伝わる日本の技を来場者の皆さんに紹介しました。当会でも、例年通りの展示や実演を行い、檜皮葺を始めとする伝統的屋根工法を紹介しました。期間中は多くの来場者で賑わい、当会のブースも大変盛況で、有意義な出展となりました。

古くは、この場所に^{さいくう}斎宮^{*}があり100棟以上の建造物群が整然と並んでいたそうです。復元された斎宮寮庁の檜皮葺建造物を目の前にし、古来より連綿と伝えられてきたこの技術を未来に向かって繋いで行くことの意義を改めて感じさせられました。

※斎宮とは…天皇に代わって伊勢神宮に仕えた皇族の姫君、斎王(さいおう)の暮らした宮殿。



取材を受けながら体験コーナーで竹釘を打つ子供たち



興味深げに覗き込む来場者



「さいくう平安の杜」の復元建物

発行所

京都市東山区清水二丁目 205-5
文化財建造物保存技術研修センター内



公益社団法人 全国社寺等屋根工事技術保存会

TEL 075-541-7727 FAX 075-532-4064
<http://www.shajiyane-japan.org>

古文化 第115号

平成 29 年 11 月 30 日発行

あ と が き

今年も残すところあと1ヶ月です。街は色づき、クリスマスのイルミネーションがあちらこちらに見受けられるようになりました。

明治の文豪、幸田露伴の自著『努力論』には、「努力は 進んで止むことを知らない人間の本性なのだから 努力すべきだ。だが やみくもに努力すればよいわけではない。“努力して努力する”それは真のよいものではない。“努力を忘れて努力する”それが真のよいものである。」とあります。

つまり、自分が努力していると思っているうちはまだまだで、収穫の喜びや未来を描く希望が大きければ辛い仕事も嫌でなくなり、“努力を忘れて努力する”状態になるということでしょう。来年も努力してよりよい年にしたいものです。

■ ふ る さ と 探 訪 ■

木下 岩男さんの古里

「古くて新しい長浜」

(滋賀県長浜市石田町)

木下岩男さんの故郷は、琵琶湖の北西に位置する滋賀県長浜市だ。滋賀県と聞いて誰でもまず思い浮かべるのは、日本一大きな湖である琵琶湖だろう。面積は淡路島より広く甲子園球場の1万7千個分。第2位の霞ヶ浦の3倍もある。日本地図を開いてもすぐに広大な湖が目につくため、滋賀県の陸地は湖を縁取るようにほんの少しばかりあるだけ、という印象を抱いている方が多い。実際には滋賀県の中で琵琶湖が占めている面積は約16%で、県の陸地は湖の5倍もあるのだ。木下さんの住む長浜市石田町は、琵琶湖から約5km離れているので湖面は見えず、すぐ後ろに横山がそびえている。

小説やテレビドラマでは戦国時代の合戦の舞台として描かれることの多い長浜だが、実際に訪れてみれば戦国イメージとは異なる地元名物もいろいろ存在する。焼鯖素麺やきさば そうめんもそのひとつだ。

焼鯖素麺とは長浜市周辺に伝わる郷土料理で、その名の通り焼鯖とそうめんを炊き合わせた料理のこと。田植え時期になると、農家へ嫁いだ娘の嫁ぎ先に実家から焼鯖を届ける湖北地方独特の風習「五月見舞い」に由来す

る。若狭湾で水揚げされる鯖は、内陸に位置する長浜では貴重な食材だったことだろう。農繁期でも手早く調理でき、客をもてなすハレの日の御馳走としても欠かせない一品だった。元々家庭料理だが、長浜名物として観光客に提供する料理屋さんも多数ある。麺の色が濃い茶色だったり白っぽかったり、汁気の多いもの少ないものなどお店によって値段も味も様々だ。

また、長浜のっぺいうどんはとろみのある餡かけ状の出汁が特徴的なうどんで、明治9年(1876)に京都から長浜に移り住んだ店主が京都に多い葛料理にヒントを得て考案したというから、すでに百年を超える伝統を持つ。市内あちこちのうどん店等で食べることができ、お土産としても販売されている。

近年は、焼きそばの上にミートソースをかけたイタリアン焼きそばが人気上昇中で、これもいつの日か長浜名物となるのかも知れない。



古文化

第 115 号



公益社団法人 全国社寺等屋根工事技術保存会